

「国語の力」の成立過程 Ⅱ

— 国語教育學說史研究 —

野地潤家

四

垣内松三先生は、大正五年（一九一六）三月、雑誌「国語教育」（第1巻第3号、大正5年3月1日、育英書院刊）に、「説方能率の調査」を発表していられる。「説方能率の調査」は、三節から成る未完の論稿である。筆者「垣内松三」の肩書は、「東京女子高等師範学校教授 文学士」となっている。いま、その論稿を、つぎに掲げる。

画家は自分の仕事を正しく観察し思索するために時々画架を離れて己が画き来った跡をうち眺めながら暫時静慮に入る。

この静慮こそ作品を完成する上に貴い心の作用である。人間の目も手も心もあまりあてにならぬ。あてにならぬ目や手や心をあてにして仕事をあせる噪がしい心を叱して重厚な謙虚な心を以て自分の仕事を省察する時に、矛盾や衝突や齟齬を発見してどうしてもこれを補正しなければならぬという努力を生じ来るところに作品完成の

立派な動力が潜んで居るのであると思う。

このことは独り画の上のことのみではない。国語教育の徹底を望むものも只声高に仕事の仕ぶりを説き立てるのみでなく、仕事の出来ばえに就いて画家が時々入るような省察と静慮とを要するのではあるまいか。

茲に説方能率 Efficiency の調査に就いて所見を陳述して大方の示教を仰ぐのは国語教育の改良進歩を考究する根本問題が先ずこの点に関わるところが多いことを思うからである。

二

在来国語教育に関する理論や方法に関しては随分多くの主張や主義を学んだ。しかし私の是非とも承知したいことは、其等の主張や主義の結果としてどれだけ効果があったかというのっぴきならぬ問題である。もとより理論や方法は其の実績の有無如何に関わらず価値意義のあるものであることを信じてその研究を尊重するのであるが、それは教育的心理学や実験心理学の研究としてである。

国語教育という活ける事実の問題から観る時には、只研究の結果を応用して得た臆測や推断に満足することを得ぬ。どこまで効果が著ったかという問に対して真剣の答を得ねば満足し得ないのである。又我が主張主義に依ってこれだけの効果を挙げ得るといふ確信を聞くことを望むのである。この決答を迫らるゝ時なお漠然たる曖昧なる押し問答に逃がるゝ理論や方法は空想である。私は国語教育に関する研究の大勢はもっぱや Solten や Nilsson の中に逃避する得々たる高言を後にしてもっと真剣な熱誠な真実な要求の方に突進して来て居るのであると思う。再びいふ。過去及び現在の国語教育の効果はどこまで挙げて居るか。どこに長所があり、どこに欠陥があるか。更にいふ。この問に対して科学的正確を以て考究した真率な誠実なる答案があったか。若しこの問題に対して確実なる答案を有しないならば国語教育の改良進歩は到底望むべくもないのである。私はこのことを思うにつけて常に留意した点は生徒の国語力を観測する方法に関する研究であつたが、国語学習の習慣は既に長い間継承されて全く化石して了つて居る為にいろ／＼の試験法も其の効果を再び一再ならず失望したのであつた。然るに偶然ニューハンプシャーの学校で計画せられ実行せられた説方教授の能率測定法に関するブラウン H. A. Brown 氏の報告を得て、私の研究の上

に強い暗示を得たのである。

三

先ずブラウン氏の報告の概要を述べて見たい。

説方の能率を査定するには三つの事項を考察せねばならない。(一) 読み方の速度 (二) 内容把握の分量 (三) 内容把握の性質である。

何となればもしこゝに読書力を同じくする二人の読者があつてその読み方の能力を測定すると仮定すれば、優劣を判定する標準は一定の時間内に読み得る分量の多少に由つて定めねばならぬ。次に一定の時間内に同じ分量を読み得る二人の読者の優劣は其の内容把握の分量の大なる方が勝れて居るのである。更に把握の分量が同じことであつたらその判定は把握の正否に由つて決定せねばならぬ。故に最上の読書力は一定の時間内に最多量を読み、その読んだことの大部分をしかも正確に再現し得る能力をいうのである。故に読み方能率の測定法は (一) 速度 (二) 把握の分量 (三) 把握の性質の三方面より測定すればその概要を察し得るのである。

以上の理由に拠つて實際にこれを施行する際には、各学年級の学力に依つて選択した一ページ半ばかりの印刷した文章を読ませて見た。印刷は活字の型も行数も頁の形も各年級用の読本に準じたものであつた。先ずこれを裏返しにして児童の机の上に置かしめ教師が一定の合図をすると同時に一斉にそれをかえして読み始めしめた。一分時の後にまた合図をして読むことを止めさせると同時に、読んだところまで記号を記^すさせた。それから後十分を与えて今読んだことを記憶しているだけ書き記^すさせた。

右のようにして得た答案から

一、読み方の速度

二、再現の分量

三、再現の性質

を測定することができたのである。

然るにこの測定を行つて見るといろいろの事実が発見された。例えはある児童は読み方の速度と再現の分量は大であつても再現の性

質がよくない。又ある児童は速度は遅いが再現の分量と性質とのよいものもある。この孰れが読方の能力の優れて居るのであるかは議論の生ずるところである。これは一個人一学級一学校に就いても考え見ねばならぬ問題である。茲に於てか測定の標準を定める必要がある。そこでこれには便利な標準を定めることとした。即ち再生觀念の分量の百分率と性質の百分率とを平均した数に速度を表わす語数乗じた積を以て読書力としたのである。

この実験測定法は七の学校に実行して見た。この七校はある点に於てはそれと異つた教授法で読方を教えて居たのであったが、この実験から教授法の効果を分析して、いかなる教授法が最も有効であるかを査定することを得たのである。特に読書力の三要素の關係に就いて重大なる問題が具体的に表示せられるに至つたのである。即ち速度が早く分量が多く性質が良ければ読み方教授は最も有効に行われて居るのであるが、もし速度は早くても再現の分量や性質が不良なれば教授法はよろしきを得て居ないのである。速度分量性質共に小なれば読書力は無いのである。

こういう測定結果が図表に示されてその学校の読方教授の能率が露骨に明白に曝露されて來たと同時に、読み方教授の根本的革新を暗示するに至つたのである。ブラウン氏がこの報告を結ぶに當りて「單なるしきりで行われて居るばかりで少しも科学的の基礎に立たない現今の学校の實際教授は一度科学的測定評価の利刃に置えは忽ち截断せられるものではあるまいか。而して新しくして且つ正しい読み方教授の基礎が定められてその上に初歩の読み方教授法から建設せらるべきものではあるまいか。更にこの問題と關聯して読方の心理及生理に關する全問題の分野を吾人の眼前に開展するのであ

る。敵對なる科学的分析の眼を備いて既に知られたる事實を考慮し選択し精査し、全ての貧弱なる分子を排斥して最も有効なる方法を形成するように進めることは教育上最も重要なことである。」と論破した結論は果して外国に於ける一報告一警告として看過してよいことであらうか。一たび我が國語教育の實際に考え及ぶ時に與に痛切なる感想を禁じ得ないのである。(以下次号)(雜誌「國語教育」1の3、九六—九八—)

右に引用した論稿は、H. A. Brown 氏の読方教授の能率測定法に關する調査報告の紹介であるが、單なる紹介にはおわつていない。それは切實な問題意識に交えられて、わが國語教育界への批判的提言ともなつていゝといえよう。國語教育の改良進歩を考究する根本問題として提示されているのである。

この紹介が切實な問題意識に交えられているのは、垣内先生みずから、「私はこのことを思うにつけて常に留意した点は生徒の國語力を観測する方法に關する研究であつた」(同上誌、九六—)と述べていられるように、ブラウン氏の調査報告に據る前から、この問題に深い関心が寄せられていたからであると考えられる。

また、論稿の冒頭に、画家の制作時における「静慮」の問題を提示し、「この静慮こそ作品を完成する上に實い心の作用である。」(同上誌、九六—)と述べてあるのからもわかるように、すでにこのころ、内省的立場への関心が深められていたことも、問題意識を切實にしていゝと思われる。

國語教育の論究や論述に、他の諸領域から具体事例が引用提示されるのは、垣内先生の發想の一つであるが、この画家の「静慮」も

それに属する。「国語の力」成立の機縁となった長野講演「国語教授と国語教育」の中にも、「画家が筆を採ったまゝ、よく画架から離れて熟視の後、一点一線を加える時に、画面が忽ち生氣を帯びて来るように、教材の研究に於ても、時々自ら反省して研究の上に活趣を喚び起さねばならぬ事があると感ずるのであります。」(有朋堂版「国語の力」二九六頁)とあるのは、この論稿の冒頭部のそれと一致する。長野講演の内容には、この「読方能率の調査」が相当に収められていると考えられる。

長野講演「国語教授と国語教育」は、その中心内容が、

- 一 教材の研究の仕方
- 二 教授の結果の見方
- 三 教授の方法

の三部から構成され、その順序によって述べられている。これらのうち、「二」教授の結果の見方」には、主として、ブラウン氏の「読方能率調査法(測定法)」をふまえて垣内先生ご自身で視察され、測定された読方速度(分量)が示されているのである(有朋堂版「国語の力」三〇七―三一一頁)。ブラウン氏の調査報告を紹介するだけでなく、その方法を採用して、視察の国語教室で奥地に測定を試み、その結果を資料として活用されるところに、垣内先生の熱意の深さを見ることが出来る。

この「読方能率の調査」は、長野講演の成立に一つの大きい役割を担ったものといえよう。

「国語の力」⇄「国語教授と国語教育」(長野講演)

- 一 「国文学研究法」(講義)など
- 二 「読方能率の調査」(論稿)

「国語の力」成立に関し、この論稿「読方能率の調査」を、右の

ように位置つけて考えることができる。

五

「国語の力」の成立過程におけるヒューイ (Huey, E. B.) 著「読方の心理と教育」(The Psychology and Pedagogy of Reading, 1910 [新訳]) のはたした役割について考えたい。

垣内先生は、「国語の力」の「序」に、「ゼームス、ヴァント、セツペリー、モウルトン、ヒューイ、コーエン、クローチエ等の諸家の所説に負う所が尠くない。」(有朋堂版「国語の力」序、三頁)と述べていられる。なかでも、「ヒューイ」「モウルトン」には、負うところが多いように思われる。

ヒューイ著の「読方の心理と教育」は、昭和2年10月10日に、木下一雄氏により、「ヒューイ読方の心理学」として、翻譯刊行されている(日東書院刊、四六版四八四頁)。それによれば、同書の内容は、「原序」のほか、つぎのように、四編二二章から成っている。

第一篇 読方教授の基礎論

第一章 読方の神秘と問題 (3節)

第二章 読書中の眼の働き (17節)

第三章 読書停読中知覚さるゝ読書物件の範圍 (5節)

第四章 読書中に於ける視覚の実験的研究 (10節)

第五章 読書に於ける知覚過程の性質 (4節)

第六章 読書の内部的発語及び発語の精神物理的特質 (6節)

第七章 読まれて居るものゝ知覚に於ける内部的発語の機能

(4節)

第八章 読まれるものゝ相互的關係及び意味の性質 (6節)

第九章 読書の方法 (5節)

第二篇 読方及び読書方法の歴史

第十章 態度及び絵画の相互關係と読書の起源 (5節)

第十一章 アルファベット及びアルファベットの記号に依る読書の進化 (9節)

第十二章 印刷物の進化 (5節)

第十三章 読書方法及び教科書の歴史 (5節)

第三篇 読方の教育学

第十四章 現代式方法及び初歩的読方の教科書 (7節)

第十五章 初期の読方に関する代表的教育家の意見 (6節)

第十六章 家庭に於ける読方学 (8節)

第十七章 学校に於ける読方学 (7節)

第十八章 訓練として又書籍の有効なる使用の訓練としての読方 (5節)

第十九章 読むべき物、青年期の読書 (5節)

第四篇 読方の衛生学と結論

第二十章 読書の疲労 (5節)

第二十一章 書籍及び新聞紙の衛生学的要求 (5節)

第二十二章 読方及び印刷術の将来 (3節)

右の項目によつてもわかるように、ヒューイのこの著は、読方の心理と教育に關して、実験研究の成果をまとめ、歴史的考察の展覧をなした、基礎論、方法論の両面にわたる概論書である。なお、本書の成立と性格とに關しては、ヒューイみづから、つぎのように述

べている。

「著者は読方に対する研究を約十年前に始めたが、それは當時自分の友人であり、又研究室に於ける研究仲間で、今はミツワスワリ大学の教授である G. M. Wipple 氏に依つて持ち出された心の内で発音する事なしに読書が可能であるか否かと云う事に関する問題に依つて最初の暗示を受けたためである。長い間私には読方の過程は思考の過程と相照し合うもの様に思われていた。斯くて読方過程は心理的分析に対する適當なる問題である様に思われ、様になつた。其の他読書より生ずる特種の疲労は、其の疲労の原因を知らんとする好奇心を私に起さしめた。そして又読書率 (読書の速度) に多大の變化と制限があると云う事からして、此処に何等かの改良の可能性のあることを暗示せられた。

斯かる考えが私の実験的研究を生ぜしめたのである。研究の分野は明瞭と思われた。熱心に文献を探索した結果、本来の所謂読書法に關するものとしては Javal と其の門下生及び Romanes, Quantz, の予備的実験のみしかなことが解つた。Erdmann 及び Lodge が其の当時彼等の研究を完成しつゝあつたのであるが、彼等の研究の事は其の後一年を終つて知つた。斯くて試験家に提示された読書法の問題は實際に未だ手のつけられない分野である。

実験心理学が以つて誇るに足る発達が十年間に此の分野に成されたのである。Lodge, Zeitler, Messner, Learborn, 及び其の他の人々は読書法の重要な方面を完全に研究した。そして其等集められたる諸研究は、今日では包含されている重要な過程に關し相當なる記録を示しているのである。随つて此の研究に対して概論を作る要があると私は思うのである。併し此の概論は此の問

題の結末をつけるものではなくて、それは今後の研究に対する新らしき出発点を供するものであり、新研究に対する概観を与えるものである。」(木下一雄訳著「ヒュ説方の心理学」原序、一―二二)

右の序は、一九〇七年二月二十五日に、ペンシルバニア、ピッツバーグにおいて、しるされているから、ヒューイは、一八九八年以前から、この研究を始めたことになる。明治三〇年代のはじめあたりから研究に着手し、明治四〇年ころにまとめられたわけである。十九世紀末から二〇世紀初頭における説方研究の成果を、できるだけ広く集めたものといえる。

六

「国語の力」刊行第十五周年記念改版(昭和十一年五月二十七日、菊版、四〇版)には、序の前のページに、

雪片を手にしてその微妙なる結晶を見んとする時掌上に在るものは一滴の水なり。^{注1}

水滴を分析して結晶の形象を見んとするが如きは今の国語・国文学習の態度なり。

言語文学の本質を研究せんとせば先づ直下にその微妙なる形象を捉ざるべからず。

と、採録されている。このうち、とくに有名なのは、最初の一文である。これについては、ヒューイの「説方の心理と教育」の中に、つぎのように出ている。

「文を一瞥する為に、その文を中間に於て切斷せんと企てる事

は、ジエームス氏の図解に於ては、温い手の上に一片の雪の結晶を得んとするが如きものである。一片の雪は最早結晶ではなくて、それは一滴の水である。」(木下一雄訳著「ヒュ説方の心理学」第六章第五節 文の本質、一四五―)

眞内先生も、ここにそのヒントを得ていられるのではないか。しかし、それは単なる借用・引用ではなく、第二、三の文とあわせ読むとき、それはすでに「国語の力」の立場に立ち、それを要約しての批判的提言となっている。ここに、ヒューイからの摂取・消化の典型を見る。

さらに、「国語の力」においては、ヒューイの書物からとられているものが、つぎのように見られる。

1 「今日我々は、読むことに就いて少しも驚異を感じない。したがって、その作用に就いて考えて見る心も起らないほど日常のことであるが、ヒューイの『説方の心理と教育』に記するところによれば、リビングストンが毎日本を読むことを異し、且つ畏れたアフリカの蛮人が、どうかしてその秘密を知りたいと思って、とうとうその本を盗んで食って見たという小話に見えぬ蛮人の心は、原始時代に於ける読むという作用に対する原始人の驚異を示すに足るものである。読むことは神聖なことであり神秘なことでありヨブ(呼)という語源を通じて居るのでも分るように、音律的な説方から不思議な力が読む人の上に在るように思われた。」(有朋堂版「国語の力」一 解釈の力 一 読む力 二―三)

1 「古代人にとっては説方は、其の奥行に於ても、其の起源に於ても、最も神秘的な技の一つであった。近代に於ても、リビングストンが、旅行の困難であった事を書き残して書かれた一冊の書籍を、毎日読

むのを見て、アフリカ民族が、如何に不思議と畏懼とを感じたかと言う話を、思い出すのである。此等、野蠻人にとっては、彼が書籍を讀むと云う事は、非常に不可解の事柄であつたのである。それが為に、彼等はその書籍を讀むと云う事、及び此の書籍から白人の満足を得ると云う事に就て、彼等の知っている最も長い方法として、終に彼等から其の本を盗み、それを『食つた』程である。此の読書の神祕は、自然古代人の間に於ける印刷された語や、書籍及び讀書、読書家に対する尊敬に導いた。読書は神々しい力を持つて居る人に依つて為される神聖なる仕事となつて来た。そして書籍は、一つの物神(崇拜物)となつた。書かれたる語は、野蠻人には常に神祕なる意義を示した。」(木下一雄訳著「ヒュ説方の心理学」第一章第一節 説方の意義、三六)

2 「而してこの心が覺めて、我々の説方を内省する時に、我々の説む力が困難に抑留せられてすくすく伸ばされて居ないことに気づいて、憤りをすら感ぜずには居られないであらう。そうしたら、ヒュイの謂つた『リビングストンの本を食わせた猿類に似た新しい疑問』は、亦我々の問題ともなるのではないであらうか。」(有朋堂版「国語の力」一 解釈の力 一 説む力 四六)

2' 1'に引用した箇處のほか、「而して精神生理学的作用として、読書其のものは、殆んど奇蹟にも等しいものである。普通の讀者にとっては、各頁を讀んでゆく作用は、リビングストンの読書を、野蠻人が理解したよりも充分には理解されて居ない。事実二十五年前迄は、科学は優れた専門的説明を示す事は出来なかつたのである。本書の研究の内の心理的部分は、読書の作用に対する、私自身の單純なる驚きと、その機構を知らんとする好奇心とより、主と

して生じたものである。而してこの驚異は、アフリカ人のそれよりも異つた方向に表われたので、之の各時代の神祕を解く為に努力するに當つて、其の他の驚異との科学的協力、及び科学と云うもの、優れた道具を使用したのである。如何にして読書するかと云う事を研究する事は、一生涯の仕事として充分な問題である。」(木下一雄訳著「ヒュ説方の心理学」第二章第二節 説方の進歩 六七)

3 「ヒュイが『文は思想の統一的表现である』といつたのも、
3 ヴントが『文は総合的にして分解的なる過程である』とか『同時的、継続的なる全体』であるといつたのも、この作用を明かに示すものと考へることが出来る。解剖の前に直下に會得したものは文の総合的同時的なる統一であるが、それは通説作用の第一の終点であり解剖の後に來る帰結は第二の終点である。」(有朋堂版「国語の力」一 解釈の力 一〇 センテンス・メソッドの理論的基礎 三二二)

3' 「言語は文と共に始る。そしてこれは如何なる處に於ても言語の單位である。一つの文は一つの思想の統一的表现である。一つの思想は時としては一語の内に表現され得るでもあらう。この場合にはこの語は文的語 (Sentence words) である。」(木下一雄訳著「ヒュ説方の心理学」第六章第三節 発語の性質 一三三八)

注2

3 「而してヴントに従えば、この文は『意識内に表れる全体のその部分への分解』である。従つて文を作る事は分解的である。何故なれば、それは全体の部分の分解であるからである。然しそれは又意識の焦点に於ける部分の継続的現出であると云う点に於て、総合的でもあると彼は考へている。彼は付け加えて言つて居る。『然し乍ら就中それは分解的過程である。』」(木下一雄訳著「ヒュ説

方の心理学」第六章第五節 文の本質 一四三六)

3 「心理的に考えられる時には、文はそれ故に同時的全体であると同時に、継続的全体である——個々の第二義的要素は偶然には消失するであらうけれども、文の構成の各瞬間に於て、文はその全範圍に於て意識内に存在するが故に、同時的であると云い得る。」

(木下雄訳著「ヒュ説方の心理学」第六章 第五節 文の本質 一四四六)

4 「文を熟読して、文意を默会する時、文の上に作者の思想の形が内視せらるるようになり、又作者の思想の律動が内聴せられるのである。愛動する詩歌を讀む時に、かすかに唇の顫えることを覺ゆるのは、我々のよく経験するところである。ヒューイの内辭説 Inner speech はこれをいうのである。發音機關を動かして音讀する外辭 Outer speech と區別して、發音せざる心の中の辭を指示するのである。而して外辭が、高低・強弱・音色の性質を有つように、内辭はこれらの性質を有する心の中の辭の響きを示すのである。(有朋堂版「國語の力」一「解釈の力」二六「解釈の着眼点」七三—七四六)

4' ヒューイの内辭説は、「第六章 説書の内部的發語及び發語の精神的物理的特質」(木下雄訳著「ヒュ説方の心理学」(一三〇—一五九六)に述べられている。

5 「ヒューイが文は同時的継続的の全 Simultaneous and successive Whole であるというのは、文の性質の兩方面を統一した考えであつて、解釈の作用をこれと同じような見方に依りて統一することができぬ。」(有朋堂版「國語の力」一「解釈の力」二七「解釈の三方面の統一」七七六)

5' 「心理的に考えられる時には、文はそれ故に同時的全体であると同時に、継続的全体である——個々の第二義的要素は偶然には消失するであらうけれども、文の構成の各瞬間に於て、文は其の全範圍に於て意識内に存在するが故に、同時的であると云い得る。

そして他方、確定的觀念は逐次に焦点の中に表われ、他のもの不明瞭になつてゆく。けれども全体はその意識内容に於て、各瞬間毎に変化するが故に、継続的であると云い得る。」(木下雄訳著「ヒュ説方の心理学」第六章第五節 文の本質 一四四六)(なお、こゝは、ワントの *Völker Psychologie*, vol. 2, p. 226, ff. にもついでている。)

6 「ヒューイが、昔の運搬や転送に比して我々の旅が、蒸汽や電氣の發明によつて経済的にも愉快にもなり、天才的發明家の鋭い根氣のよい努力に依つて電信や電話が發明されて通信が便利になつたように、印刷や製本も常に注意深く持續的に改良されて来たが、読方の上にはまだ實現されないといったのは、この場合にも考え合はせられる。」(有朋堂版「國語の力」三言語の活力 二三文の形態学的研究 一七四—一七五六)

6' 「人類の思想は、運搬及び移動の因習的方法を合理化し、遂に吾々は、蒸汽及び電氣機關車を有するに至り、近代の旅行の經濟及び愉快を有するに至つたのである。隔地間に於ける通信の手段には、發明の天才の最も鋭敏なる、而して最も永続的なる努力が向けられた。電信学及び電話に関する近代の奇蹟はその結果である。印刷術及び書籍の製造さえも、注意深い研究及び継続的な改良を行つて来たので、遂に印刷業者の技術に関する奇蹟に目前に迫るに至つたのである。斯くの如くであるが尙印刷された頁其れ自身の全ての

本質的特性及び吾々が多数の時間を要して意味を把持するところの読書過程の全ての本質的特性は、読者の時間、精力、或は愉快の為に決して合理化されて居ないのである。」(木下一雄訳著「ヒュ説方の心理学」第二十二章 読方及び印刷術の将来 第一節 文化と読書 四七二—四七三)

7 「クアantz、ディヤボルン、ヒューイ等の実験に依れば、発音法も、黙読法(唇を動かして)も別に文の解釈に注意を集中する力とはならぬのである。」(有朋堂版「國語の力」四文の律動 二〇視読の音感 二二三—二二四)

7' 「読書に於ける口唇の使用は、注意の集中或は理解を助ける者としては見出されなかつた。尤もそれは注意の集中の結果として、屢々生じたのであるが。一般に口唇の運動は読書の速度に対する大なる障害であると見られた。」(木下一雄訳著「ヒュ説方の心理学」第九章第二節 読書の最大限度と障害 一九八)

8 「前に『あつい!』という一語の中から、一文を構成する内容を説むのは、その音感に由るものであることを述べたが、ヒューイが『おとうさん!』という一語をその音調によりて『おとうさん! こへいらっしやい』とも『ごらんない、おとうさん』とも『おとうさん、これをしてください』とも読み得るといふように、音調高低等はその文字や綴音の形よりもよく話す人の意味を表わすのである。」(有朋堂版「國語の力」四文の律動 二〇視読の音感 二二四—二二五)

8' 「『パパちゃん』は『パパちゃん此処にいらっしやいよ』『パパちゃん御覧よ』『パパちゃんして頂戴よ』の如き意味を調子等の変化及前後の状態に従って表すのである。屢々調音、アクセン

ト又は韻律は語それ自身よりも充分に話す人の意味を表現するものである。そして前者の要素は、全体として文に属するのである。」(木下一雄訳著「ヒュ説方の心理学」第六章第三節 発語の性質 一三九)

9 「私のこれまでの中等学校に試みた多くの記録から得た平均は、一分間に二五〇—三〇〇字というわかり易い数字に翻訳することが出来る。(クアantz、ディヤボルン、ヒューイ等の実験もあるが、我々の場合に直ぐさま移すこともできず、又その研究も充分なものではない)。(有朋堂版「國語の力」四文の律動 二一通読の速度 二二九)

9' 読書の速度に関しては、第九章 読書の速度(「ヒュ説方の心理学」一九四—二〇七)に述べられている。

10 「ヒューイは一時間二十五分で普通の小説三百二十頁を読了した一数学家の实例を挙ぐるのであるが、この挙例には我々の読方の速度を考える対照として手がかりとする条件を明示してないから比較の便を欠くのであるが、私の実験では同じような場合に於て、六十頁から百頁内外が普通である。」(有朋堂版「國語の力」四文の律動 二一通読の速度 二三一)

10' 「数学家である一人の大学生の友達は、私に次の如き事を知らしてくれた。即ちそれは三百二十頁の代表的小説全部を、彼は二時間十五分で読み終つたと云う事である。かゝる速かなる読書に関する偶然的な、しかも極めて稀な例は、印刷された記号を取扱りに當って吾々は、吾々の可能性の遙か内にあるであらうと云う事を暗示するのである。」(木下一雄訳著「ヒュ説方の心理学」第九章第四節 読書率の条件 二〇六)

11 「ヒューイが文の能産の作用をボール擲に比較して、それを分析すればボールの握り方、腕の揚げ方、振り方、最後に投げ方の複合であるが、ボールを擲げる刹那に、誰れがかような作用を別々に意識するものがあるか、文を産出するのそれと同じことであると謂った比喩を、こゝに文を読む作用の説明にも用いることができる。」(有朋堂版「国語の力」四文の律動 二二総括 二三三べ)

11' 「実際一つの文を話す場合の活動はスケートをしたり、ダンスをしたり、玉を投げたり、或はかゝる統一の複雑なる筋肉運動と同種類のものである。例えば玉を投げる場合に、玉を握むと云う、其れ自身極めて複雑なる補助的運動がある。腕を挙げる事及び平衡せしめる事、及びそれ等を行ふに當つて、必要な全ての事が行われる。そして又複雑なる最後の投げると云う行動がある。扱握る事平衡ならしめる事、投げる事は各々それ自身に向けられたる充分なる注意を以て、別々に行われるであらう。しかし彼が狙つて、そして投げる時に、かゝる区別された運動を考へる者があるだらうか？ 全行動の意味、即ち標的を打つと云うは、全ての事を導き支配し統一化するのであつて、各運動が単独である場合より、各々の運動を区別せしめるのである各々の補助的運動は、全ての配景の中になされるのである。」(木下一雄訳著「ヒューイ説方の心理学」第六章第六節 発語の生理 一五六—一五七べ)

以上、「ヒューイ」の語が直接に引用されているものだけでも、11例にのほつている。これらのうち、「国語の力」の内容に即してみれば、

一 解釈の力 1、2、3、4、5

二 文の形

三 言語の活力 6

四 文の律動 7、8、9、10、11

のように引用され、一 解釈の力、二 文の律動、に集中している。

これらの引用を、ヒューイの「ヒューイ説方の心理学」に即してみれば、

第一章 1 (1の1)、2 (1の1、1の2)

第六章 3 (6の3)、4 (6)、5 (6の5)、

8 (6の3)、11 (6の6)、雪片(6の5)

第九章 7 (9の2)、9 (9)、10 (9の4)

第三章 6 (22の1)

のように、第六章 読書の内部的発語及び発語の精神的物理的特質、および第九章 読書の速度 に集中している。なかでも、第六章 第三節 発語の性質、第五節 文の本質、第六節 発語の生理が主としてふまえられ、また、読書の速度(第九章)にも多くの関心がはらわれている。

「国語の力」の「序」に、「第一巻は研究法・批評学及言語学的諸研究・文学概論を整理して、これを『説む』という作用の上に集め、『説方』ということを実際に結びつけて新しい仕方て話して見たいと思つたのである。」(有朋堂版、二二)とあるように、「説む」ことを中心の問題にすえてあるだけ、ヒューイの考えかたから撰取していくばあも、その内辭説や読みに関する実験研究に、関心が向けられたのもしぜんである。

事例、挿話などの引用のしかたにも、垣内先生の独特の読みと

りがりかがわれる。鋭く巧みに、切りとってあるといつてよく、そこに、垣内先生の、詩的燃焼を汲みとることもできるようである。

なお、「国語の力」の本文には、ヒューイからと明示されていないが、ヒューイの「説方の心理と教育」をふまえて述べられたものがある。

たとえば、

1 「実験心理学の方面から現われた説方の心理の研究は、説方の教授の方まで進んで居る。こゝに説方教授の実際と結びついて、学校の国語科に於ては、生きた説方を新しい時代の人々に教授しようとする作業の上にそれを現わして居る。」（有朋堂版「国語の力」四一五〜）

2 「先ず説方の心理の研究を一瞥する。説方の教育は、各国に於てそれぞれ長い歴史がある。これを分ちて三とすることができる。

元來説方の心理的過程に於ては、まず第一には文字を覚えねばならぬ。それと伴うて文字の訓方、即ち発音の仕方を習ねねばならぬ。

その次に言語の結合に対する注意が現われるのである。この心理的過程は、やがて説方の歴史であつて、今日に於ても、そのどれかが特に強調された説方が残存して居る。併しながら現今一般に行われて来た説方は、所謂文自体から出発する Sentence method であつて、以上の全ての説方を綜合し、文を以て之れを統率する方法である。その上から種々の工夫が行われて居る。」（有朋堂版「国語の力」九一〜一〇六）

3 「雪片を手執りて、その微妙なる結晶の形象を見んとする時、温い掌上に在るものは、唯一滴の水である。」（有朋堂版「国語の力」八四〜）

などは、ヒューイからとことわつてはないが、それをふまえられ、参考にされたものではないかと推察される。

「国語の力」の内容は、大きくわけて、

I 解釈の体系

II 国文学の体系

の二つになる。このうち、とくに、I 解釈の体系を、

一 説方

二 解釈法

三 批評法

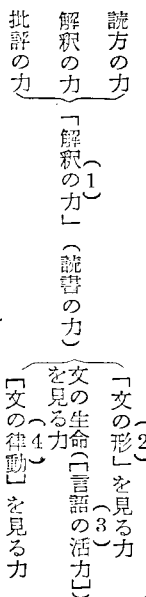
から考究探索していくのに、ヒューイをふまえられた面が多いのである。なかでも、一 説方 二 解釈法 の面で、さらには、解釈各論のうち、「文の律動」の面で、しばしば引用され、ふまえられている。

二 解釈法 三 批評法 に対して、一 説方（なかんずく、セントンス・メソッド）を考察され、それを取りあげていくのに、ヒューイの著述・所説は、大きい拠点の一つになったと考えられる。

注1 この文は、「国語の力」（有朋堂版、二 文の形、一 文の形と想の形、八四〜）の本文中にも、口語で書かれている。

注2 ヴントのことについては、別の機会に触れたい。

注3 興水実氏は、「国語の力」の結構について、つぎのように図示されている。



右の数字は、「国語の力」の章の番号。「言語文化体系」（昭和12年12月15日、晩翠会編）所収、「『国語の力』にあらわれた言語哲学思想」（一六六〜）による。

（昭和35年12月22日稿）（本学助教）